2021 年度 川村文化芸術振興財団ソーシャリー・エンゲイジド・アート
審査員 選考所感

工藤安代（NPO 法人 ART&SOCIETY 研究センター代表理事）

ソーシャリー・エンゲイジド・アート（SEA）は象徴的な実践ではなく、アクチュアルな実践である。それゆえ社会的問題に対するアイディアを表現する行為（representation）に留まるものではない。他者の参加を促すためのプラットフォームやネットワーク構築が大切であり、ソーシャル・インタラクションがプロジェクトの要となり欠かせない行為となる。
これまでに増して多様性が強まった今回の申請プロジェクト中で、本多英理の『そして人類は滅亡した』は、多様な女性たちと一年間の対話を通して、ポストコロナの社会を問い直す試みである。プロジェクトの参加者が受動的な受け手の役割を超えて、批判的に自己省察するような対話が生まれていく事を期待したい。加えて今回の 9 件の支援プロジェクトが日本に新しい SEA のあり方を提示しいくことを願っている。

窪田研二（インディペンデント・キュレーター）

4 年目を迎えた本助成事業は、新型コロナウィルスの世界的な感染拡大という異例の事態を受け、今回は一部募集規定を変更し、「コロナ禍におけるソーシャリー・エンゲイジド・アートプロジェクト」をテーマとしたプロジェクトのアイディアを募集し、結果的に 9 件の事業を採択した。
女性たちと共に、『人類の終わり/人類の滅亡』を集め、予言の書として一冊の本にまとめる本間英理（キュンチョメ）の「そして人類は滅亡した」や、「他者との分断」という共通項で新型コロナウィルスと、福島における原発事故を再考する毒山凡太郎の「プロジェクト F（仮）」など、採択されたプロジェクトの多くは、今だからこそ実施する意義のあるものであり、各々の企画が実現出来るように願っている。

近藤健一（森美術館シニア・キュレーター）

Photo: Mikuriya Shinichiro

今年はコロナに翻弄される一年となった。本助成でもコロナ禍における SEA プロジェクト企画を募集したが、この趣旨に沿わない応募が多数あったのは残念であった。企画として優れていてもコロナ禍という観点がないものは助成の対象から外したが、来年以降での再応募が期待される。国内からは美術としてのクオリティを持ちつつ社会変革につながりうるプロジェクトの応募が多数あり、少額でもできるだけ多くのプロジェクトへの助成を行うことになった。しかし海外からの応募は優れた企画が少なく、コロナ禍の東北における女性の「声」や「物語」を記録するという Jennifer Clarke 氏の企画のみが採択された。被災とコロナという二重の逆境の中で、ややもすると見えにくくなってしまっている女性の日常を可視化しエンパワーメントを行うという本企画は、意義深いものであると感じた。また、日本側の協力者と協働の実績もあり、東北での作品発表場所の目途もたっているなど、実現性が高いと思われる点も評価された。

相馬千秋（NPO 法人 芸術公社代表理事、アートプロデューサー）

Photo: Yurika Kawano

コロナ禍において助成予定件数を 10 件程度と事前告知し、プロトタイプでの申請を可としたことで、特に国内からの応募件数が倍増し、結果的に幅広い層から魅力的な企画案が提案された。特に 30 代・40 代の中堅アーティストから、創造性と実現可能性の両方を兼ね備えた提案が複数寄せられたことは特筆しておきたい。今回採択された件の企画は、その中でも、ジェンダー、教育、コミュニティ、復興、ケアなどの社会課題に対して、コロナ禍での制限を踏まえつつも、正論の押し付けにならない問いの設定、それを実現する芸術的方法論においてユニークであり、それまでの活動実践から鑑みても説得力のあるものだった。

昨今さまざな形で顕在化しているジェンダー問題について正面から取り組む提案が複数寄せられた。中でも採択された工藤春香氏の「女が 5 人集まれば皿も割れる」は、すでに複数年にわたり継続中のコレクティブな活動をベースに、研究、対話、創作、展覧会アウトプットまでの詳細が明示され、一過性ではない広がりが期待できる提案だった。

また、震災から 10 年という時間を経て、「被災地」に新たな視点や営みを提案する企画も複数寄せられた。中でも小林清乃による「永い時間と牛飼いの方角、光の声?」は、福島県の天文台や放牧地を舞台に、放射線にさらされた大地とヒトと動物との関係性について、天体の運行の視座から「新たな神話」や「神話が生まれるための仕掛け」を創出するという意欲的なものだ。観測ツアーや儀式的ワークショップを行う過程で多様な立場の人を巻き込みながら、震災 10 年後にこそ可能なソーシャリー・エンゲジド・アートの新たなモデルを開拓することを大いに期待したい。

高嶺格（美術家、多摩美術大学教授）

今回は「大賞」的なものを選ばなかったので個々に対する助成額は小さくなったが、心より応援しています。私がメンションすることになった 2 つの団体のうち、マルガサリはひとつの地域での継続的な活動、キュンチョメは多様な声を取材・収集するという対照的アプローチですが、両プロポーザルともに心に残るフレーズが散見されたので、以下抜き出しておきます。

本間英理（キュンチョメ）「未来や恐怖を語ることを許されてこなかった女たち」「思想やジェンダーに関わらず多くの人が当事者性を持ち得る新たなフェミニズム」「社会問題がそのまま語られるのではなく if の未来として語られる」

中川真（マルガサリ）「ガムラン音楽では作曲家はおらず、演奏は常にその場での共同的合意で進行する」「非作者性を軸としたソーシャル・コーポレーション」「アート活動を通して地域を守る」

毛利嘉孝（東京藝術大学大学院 国際芸術創造研究科 教授）

新型コロナウイルスの感染拡大は、ソーシャリー・エンゲイジド・アートにも深刻な影響を与えた。アートの社会的「関与（エンゲイジメント）」に対して社会的「距離ディスタンス）」を要求したのだ。こうした状況は、社会的な人間関係を分断し、とりわけ社会から周縁化されている人々をいっそう孤立させた。

こうした厳しい状況の下で、なんとか既存の関係性を維持しつつ、新しい関係を産み出そうという提案が見られた。特に「引きこもり」をテーマに新しい人間関係を築こうとする渡辺篤の「私はフリーハグが嫌い」、元日雇い労働者が多く住む街、大阪釜ヶ崎で「出会いと表現の場」であるココルームの運営を続けてきた上田假奈代の「釜ヶ崎オ！ペラ」、そしてアーティスト自身のサバイバルのためのオンライン講座によってネットワーク構築を図る川久保ジョイ「コロナオンライン会議」などのプロジェクトは、そうした貴重な試みとして評価したい。